お別れよ

田宮虎彦

三笠書房

お別れよ

田宮虎彦

三笠書房

お別れよ

検印省略

定価　五八〇円

昭和四五年　六月三〇日　第一版第一刷発行

著　者　田宮虎彦

発行者　竹内静江

発行所　三笠書房

東京都新宿区戸山町三五
電話　東京（二〇三）七七八一
〒162　振替　東京二二〇九六

信濃印刷／宮田製本

©Toraiiko Tamiya　Printed in Japan　1970〔0093—001007—8936〕
乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

お別れよ　目次

花咲ける桃の木　五
ほおずき　三五
おみくじ　五七
隠岐案内　六九
菊日和　九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

写真　一〇九
椿　一三五
結婚式　一五一
春の旅　一八三
お別れよ　二〇五
あとがき　二四一

装幀　内田克巳

花咲ける桃の木

幹子の家は、……街道と今もいっている昔の宿場へ通じる古い街道に近いところにあった。十五、六年前、父親の寿一郎が死ぬ頃までは、そのあたりはまだ武蔵野がそのまま残っているような静かな郊外住宅地であったが、それから数年して急に町は変貌し、ひろがりはじめ、今ではその街道を数珠つなぎに自動車が走るようになった。街道にあふれた自動車は住宅の間の狭い通りまで入りこんで来て、武蔵野という言葉も、郊外という言葉も、とっくに忘れ去られた言葉になっていたが、それでも、一歩、そんな通りからはずれて、路地に折れていくと、檜葉の生垣がつづき、冬の初めには庭先に山茶花の淋しい花が咲いている家並がつづいていた。

立冬がすぎて間もない日曜日、幹子が夕飯の仕度の買物に出て、自動車に追われる通りをさけて、そんな生垣の間の路地を折れまがりながら家への帰り道をいそいでいると、通りの電柱のかげに若い女が不意に見えて、女は素早い歩き方でまるで小走りに走るように立ち去っていった。何の気なしにその女を見送って、幹子はまた路地づたいに自分の家のすぐ近くまで帰って来たが、その時、同じ路地をコートを着た外出姿の甥の久夫が早足で来るのに、ばったり出あった。

「久ちゃん、出かけるの」

二人がすれちがうのがやっとの路地で、自然、まともに向かいあうかたちで二人は立ちどま

り、幹子はいった。

「ああ、ちょっと」

気づまりな顔で久夫がこたえた。

「久ちゃんは今日は出かけるとはいわなかったでしょう。晩御飯には久ちゃんの好きなものを買って来たのに」

寿一郎が死んでから、母親の三代と幹子と久夫の三人だけの暮しがずっとつづいていた。いつもは幹子も、久夫も勤めに出ている。久しぶりに三人いっしょの夕飯をたのしくしようと思って、幹子は歩いて十五、六分はかかる駅前の商店街まで出て、その日ははずんだ買物をして来ていた。そんなことは久夫も知っているはずなのに、不意に出かけていく久夫に、幹子は、自分の喜びも母親の三代の喜びも踏みにじられたような怒りがこみ上げて来るのを抑えながらいった。

「友達との約束を忘れていたんだ」

久夫は怒ったようにいって、幹子を押しのけるようにそばをすりぬけ、駆け去るように路地の曲りを折れていった。久夫のそのうしろ姿を見送っているうち、幹子は、さっきは何気なく見た若い女が映子であったことに気づいた。映子は赤いコートをすんなりとしゃれて着こなしていた。幹子には、久夫と映子とが肩を抱きあうほどによりそって駅前への道をいそいでいく姿が見えるような気がして、久夫を見送ったまま、しばらくぼんやり立ちどまっていた。心が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

重たくしずんで行くのが自分でもわかった。やっとそんな心をとりなおして、久夫にはこんな気持はわかりはしないのだと自分で自分にいい聞かしながら家まで帰って来ると、無理に明るさをよそおって、

「おばあちゃん、久夫はまた出ていったのね、久夫の分も二人で食べましょう」

と母親の三代にいった。三人がそろって夕飯を食べることなどめったになくなっている。三代もさびしがっていることが、幹子にもわかった。

幹子は自分の母親の三代のことをおばあちゃんと呼ぶようになっている。それは、両親が甥の久夫を手もとにひきとってから、何時か自然に久夫にあわせてそうよぶようになってしまったのだが、両親が久夫をひきとったのは、戦後まだ間のない頃で、幹子はその頃まだ二十二、三であった。久夫には父親であり、幹子には十五、六も歳の違った兄の辰夫が戦死して、久夫は母親、つまり幹子には兄嫁の好子といっしょに、それまで疎開していた好子の実家から寿一郎のところに帰って来たのであった。久夫は寿一郎をおじいちゃん、三代をおばあちゃんとよび、小学校にはいったばかりの久夫が中心になって、幹子までが両親をおじいちゃん、おばあちゃんと呼ぶようになったのであった。自然にそういう呼び方に馴れていって、その頃、幹子は別にそれにこだわる気持はなかった。

だが、その呼び方が、心の底までとっくに馴れてしまったはずの近頃になって、幹子は、母

親の三代のことをおばあちゃんと呼んでいることに時々こだわるようになっていた。ある日、ちょうど坂道で小石につまずきでもしたように、幹子はそのことに心がひっかかってしまった。三代が久夫にとっておばあさんであることは間違いないが、自分までが三代をおばあちゃんなどと呼ぶ必要はないのであった。何時までも独身の自分が、何故そんなよび方をするのだろう。習慣になってしまって不思議に思わなくなっていること自体が不思議なはずであった。

もっとも、もし、久夫の母親の好子がずっと幹子たちといっしょに暮していたら、幹子は、そのことに気づいたかどうか。気づいてもこだわるような重たい気づき方をしたかどうか。そこまで幹子は考えてみる気持はなかった。

好子が幹子たちといっしょに暮しはじめて一年ばかりたった時に、好子に再婚の話が出た。その頃、好子は三十歳を出たばかりで、好子の実家からその話があった時、寿一郎は、何時までも好子を自分の家にしばりつけておいたことを憐れに思ったようであった。六十歳をすぎていて、少しばかりの貯金などたちまち消えてしまうインフレの波にゆさぶられていたから、若い好子を何時までも養っていく自信も一方にはなかったかもしれない。二十二、三だったその頃の幹子は、もっと純粋に好子に同情していた。結婚すると二、三年で戦争のために夫と別れ、そのまま死別してしまった若い兄嫁が何時までも婚家にしばられていることが、幹子には非人間的なことに思えた。だから、幹子は、好子が再婚していくことにかえって明るいものさえ感じていた。

寿一郎は六十五歳で死んだ。もう朝鮮戦争がはじまっていた頃であった。一生、堅実に保険会社という堅い会社につとめとおして来て、定年後も死ぬ間際まで嘱託で同じ会社につとめつづけていた。寿一郎は、一生、そのように堅実一方にすごして来ていたのだ。花の咲く木が好きで、庭にそんな木を植えるのが、寿一郎のただ一つのはなやかな愉しみであった。だから、幹子の家の庭には、春のおとずれと同時に、こぶしの花が真白に咲き、追いかけるように濃いピンクの桃の花が燃えるように咲いた。幹子は、何時かゴッホの展覧会があった時、「花咲ける桃の木」というゴッホの絵を見たが、その時、ゴッホのその絵の美しさに眼をみはった。そして、その絵に眼をみはると同時に、自分の家の庭にある桃の木に花が咲く季節を思い出した。家にある桃の木は花を愛翫する桃の木で、大きなまるい花のかたまりのように、濃いピンクの花が枝いっぱいについて、春の日射を浴びている時は、まるで桃の花が燃えているように見えるほど見事であった。

幹子はゴッホ展でゴッホの桃の木の絵を見た時、自分の家の桃の木を思いくらべたことを何時までも忘れなかったが、寿一郎も数ある花木の中でその桃の木を特別愛していた。寿一郎の言葉をそのまま借りると、その桃の木は年々枝を大きく張っていって、二、三十年の間にそんなに見事な桃の木になったというのであった。寿一郎がそういっていた頃の二、三十年といえば幹子が生れる前までさかのぼる。幹子が十歳ばかりの頃、桃の木はもう美しい花を咲かせていた。幹子も自分が大きくなるにつれていっそう美しく枝をひろげていったその桃の木が好き

であり、寿一郎の死んだあとは、寿一郎にかわって、自分がその桃の木の手入れに懸命に心をくばった。その花の咲く時季は、何となく胸を大きく張っていたいような喜びを、幹子は、毎年感じていた。

久夫が好子といっしょに幹子たちの家に帰って来た日も、その桃の花が美しく咲いていたことを幹子ははっきりおぼえていた。敗戦直後の春で、東京の町には、ほかには何一つとして美しいものはなかった。荻窪、高円寺あたりまで行くと、東京の町はもう一面に焼野原がつづいて、焼けくずれたままのコンクリート塀が残っていたり、防空壕のあとが無残な傷口のように地面に焼けただれた穴をむき出しにしていたりした。その日も、日曜日で、幹子が井戸端で闇石鹸にいらいらしながら洗濯をしていると、美しく咲きほこっている桃の花の下に、小学校へはいる前だった久夫が好子に手をひかれて立っていたのだ。

好子と久夫は姫路近くの好子の実家から、混んだ夜汽車に一晩ゆられとおして帰って来たのであった。座敷から寿一郎と三代が駆けおりていき、好子は二人にすがりついて涙を流した。痩せた小さな久夫が心細そうにその母の好子と祖父母とをじっと見ていた。

久夫はその四月から近くの小学校に入学した。幹子はその頃戦争中働いていた統制団体の残務整理の仕事をしていて、夕方、死ぬような思いで混雑した国電に揉まれて帰って来ると、団体の同僚にわけてもらった黒砂糖のかけらなどを久夫の手に握らせた。

翌年、好子に再婚の話が出た時、幹子は好子が久夫を抱いて幾日も泣いているのをよく見か

けた。好子は泣いている理由など久夫に話して聞かせることが出来なかった。話して聞かせることが出来たにしても、わからせることは出来ないことであった。また、たとえそれが、久夫にわかっても自分にとってどういうことになるのかという深い人間関係までは、小学校一年生の久夫にはわかるわけはなかった。

「そのうち、わかるようになったら、わたしから話してやる、久夫はわたしたちにまかせなさい、何とかなるよ」

久夫が寝たあと、寿一郎が好子にそう言っているのを、幹子も、その頃、そばで聞いていた。好子は姫路のおじいちゃんのところへ帰っていくといって、久夫と別れていった。久夫には、好子はすぐ帰ってくるはずであった。幾日か、好子のことはひとこともいわなかったが、十日ばかりたつうち、眼に涙をためてじっと空を見つめるようになった。ある夕方、勤めから帰って来た幹子が駅を出て来ると、闇市でごったがえしている駅前の人混みの中に久夫が駅から出て来る人波を、眼をみはって、じっと見つめているのを見つけた。幹子は、その真剣な久夫の眼に気づくと、心が冷たく凍っていくような思いがした。

「こんなところで何をしているの」

幹子はそっと近よっていって、久夫をうしろから抱いた。それから、

「いっしょに帰りましょうよ」

というと、久夫は、案外すなおに幹子について来た。

幹子は、その夜、久夫のことで寿一郎や三代といいあらそった。幹子は、久夫に好子のほんとうのことを教えてやらねばならぬといいはっているうち、自分で興奮して、涙が頬をつたわっていった。

久夫も、はじめはぼんやりと自分に起った変化に気づいていった。久夫は、その後も駅前に来ていることがあったが、幹子を見つけると、

「叔母さんを迎えに来たんだ」

とはずかしそうにいった。そんな久夫に、幹子は、自分もほんとうにそう思っているような顔をしてみせて、闇市で闇の菓子を買ってやったりした。何時か、幹子は、久夫に母親のような気持をもつようになり、久夫も好子のかわりに幹子にあまえるようになった。

二、三年たって、幹子は、三代と、久夫はもうすっかり好子のことを忘れたのだろうなどと時たま話しあうようになった。だが、久夫が小学校五年生の時、思いがけないことがあった。好子は再婚して世田谷の緑町というところにいたのだが、久夫はどうしてそのことを知ったのか、もちろん幹子にも三代にもだまって、ひとりで好子に会いに行っていた。好子が再婚したのは久夫が二年生の時であったから、それは、好子が再婚して三年たったあとのことになるわけであった。その三年の間、はじめの間こそ、久夫は、好子が帰って来ないわけを幹子に聞いて幹子を困らせていたが、その後、ひとことも好子のことは口にしなくなっていたのに、三年たって、そんなことがあったのだ。その時、久夫は好子の家にはいれてもらえなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com